

9月号 ごあいさつ

With コロナ時代の日本経済の本質的課題とは！？ [I]

二宮尊徳の報徳における道徳と経済の一致

株式会社 山西 あすなろ会顧問
代表取締役社長 西垣 洋一

日本の景気はバブル崩壊以降、低成長にあえいでおり、日本経済は永らく停滞を続けています。この間、我々の生活を取り巻く環境は大きく変わり、今の日本に閉塞感さえ感じてしまいます。この閉塞感の大元は日本経済の本質的課題である人口減少による人口構成にあります。すでに日本の人口は減少局面を迎えており、少子高齢化の進展で、日本経済の様々な面で下押し圧力が働き始めています。又、世界における日本の国際競争力の低下も声高に叫ばれています。我々木材住宅業界が昨年、「ウッドショック」に見舞われ、資材不足と価格高騰の波に襲われたことは記憶に新しいですが、アフターコロナにおける米国の住宅需要の構造変化に起因するものと言及される反面、日本の国際競争力の低下が招いたことも要因の一つとされています。

二宮尊徳 永続経営の指針 - 「報徳仕法」

今後様々な企業に未曾有の状況が懸念される今、財政再建に従事した先人・先哲に学ぶことが肝要です。その1人に報徳思想を説いた二宮尊徳翁がいます。尊徳翁が生きた江戸時代の中後期は、人口と経済の長い停滞期に当たり、人口減少と長期不況、そして生活困窮者の増大という、現在の日本と似た状況にあります。特に尊徳翁の財政再建策である「報徳仕法」は、企業経営における永続経営の指針であり、現代の日本に必要な教えと言えます。

「一円観（融合）」・・・物事の本質を洞察するための世界観であり、尊徳哲学の根本原理である。世界の根源は、あらゆるものが対立するのではなく、調和し、融合していると捉えるのが尊徳翁の世界観である。一円観の下で、すべてのものが対立ではなく、相互に作用し合い、社会のなかで融合することを一円融合と呼ぶ。

「積小為大」・・・小さい事が積み重なって大きな事になる。だから、大きな事を成し遂げようと思うなら、小さい事を疎かにしてはいけない。

「至誠」・・・報徳仕法的前提になる姿勢。私利のためではなく、利他の心を持って事あたり、誠を尽くした暮らしをすること。

「覚悟」・・・組織を復興させることは並大抵の努力ではかなわない、その覚悟を持つ。

「分度」・・・過去の歳入実績から可処分予算を決め、断固これを守ること。

「勤労」・・・善果を出すまでは各々が等しく役割を全うすべく、役務に励むこと。

「儉約」・・・生産に寄与しない浪費、贅沢は努めて抑える。利益の源泉は儉約にあり。

「推譲」・・・余剰分の利得は明日への準備に半分、後の半分は、地域、周囲へ譲り、新田開発に譲るなど未来投資に回し、永続の繁栄の基礎を築き譲ること。

「報徳」の実践 - 「心田開発」(右記参照)

尊徳翁の思想の根源は「報徳」にあります。報徳とは自然や社会の多くの恩恵に感謝し、自身の持つ良さ、取り柄、持ち味である「徳」を持ってその恩恵に報いることです。尊徳翁は「心田開発」という教えを広め、生涯を通して村民や国家の役人の「心」を報徳の思想へと意識改革することに勤めました。そして尊徳翁は、「荒れた田畑を開いても、それを耕す農民の心が荒れていけば田畑は荒地に戻ってしまう。農民の心を開いても役人が荒れていけば農民の心はまた荒地に戻ってしまう。田畑のことも、国家社会のことも、まず心を開拓することが第一であり、心を開発ができれば、国土を豊かにし、国家社会を発展させることができる。」と説きました。

歴史は、先人が遺してくれた経営の鏡であり、より良い事業を展開するための指針です。尊徳翁の報徳仕法、その前提にある心田開発の教えを学ぶことは企業の経営改善、維持発展につながると共に、現代の日本人に忘れかけた報徳の精神を思い起こさせるものではないでしょうか。

『二宮翁夜話』(巻の三九二)

荒地に数種あること

— 心田開発 —

「わが報徳の道は、荒蕪を開拓することを持って務めとする。そして荒蕪にはいろいろの種類がある。田畑がほんとうに荒れたという文字どおりの荒地がある。又、借財がかさんで家禄を利息支払いのために取られてしまい禄はあるけれども残るものがないという荒地もある。この荒地は国にとつては生地であつても本人にとつては荒地である。又、やせた土地で粗末な田地、これは年貢と反別割などの諸公課を納めるだけの収穫量しかなくて、作益の全くない田地である。これはお上にとつては税等がとれるのだから生地であるが、人民にとつては荒地である。又、資金も金もあるが、国のためになることは何もしないで自分の驕奢だけにふけて財産をついやしている者がある。これは国家にとつて、最大の荒地である。又、智慧もあり才能もあるのに、学問もせず国のためにも思わないで、音楽や碁将棋、書画などをしてあそんで生涯を送っている者もある。これなどは、世の中のために最も惜しむべき荒地である。又、身体強健であるのに、仕事もせずなまけてばかりおり、ばくちでも打って日を送っている者がある。これもまた自分のためにも他人のためにも害ある荒地である。このようないろいろの荒地、荒蕪のうち、心田荒蕪の損失こそ、国家のために重大である。次いで重大なのは、田畑山林の荒蕪である。みんなで協力してこれらの荒地を起さなければならぬ。この数種の荒蕪を掘り起こし、開拓して、全部を国家のために提供することこそ、わが報徳の道の勤めなのである。

むかしより人の捨てざるなき物を

拾い集めて民にあたえん

これが私の志なのである。私のねがいなのである。」

(株)山西 西垣